

平成二十一年度第十八回全国読書作文コンクール

小学生の部 大賞

「ヒトラーのはじめたゲーム」を読んで

竹野 雄文

今、ぼくは一冊の本を読みおえたところだ。多分この一冊の本は、これからのぼくの人生に大きな影響を与えるのは間違いないと思う。目の前にあるこの本の題名は「ヒトラーのはじめたゲーム」。途方もなく、ぼくにとって衝撃的だった。毎年夏がやってくると、あちこちで反戦の声や戦争体験をたくさん見聞きする。そのことに慣れてしまっていたぼくは戦争のおそろしさや、悲しさに対してにぶくなっていった気がする。軽い気持ちで読み始めた。そして、のめりこむように読み続けた。母が途中部屋に入ってきて「おもしろいの？」と聞いた。「うん」と言いそうになつて、あわてて口を閉じた。「おもしろい？」その言葉はあてはめることができない。おもしろいじゃなく、おそろしいから読んでいるんだ。その本は、ポーランドに住むユダヤ人の十二才のジャックという少年の身におきた出来事についてだ。出来事というのはもちろん、ナチスドイツによるユダヤ人迫害だ。始めはずっとジャック少年の家族にかこま

れた裕福で幸せな暮らしの様子が書いてある。ぼくの今の毎日とそう変わらないと思った。しかしその後、ナチスの独裁者アドルフ・ヒトラーはユダヤ人を強く憎み、ヨーロッパに住むユダヤ人を徹底的に迫害しジャック少年とその家族はある日突然引き離され、収容所へ送られる。三年間にわたる収容所での生活の様子が書かれているのだが…。ぼくはヒトラーがどんな人かとかアウシュビッツという収容所の名前とかそこでユダヤ人が迫害されたことも知っていた。でもこの本を読んで、ぼくは、何を知っていたのだろうかと思った。少年がたった一人で大人の男の中で毎日大変な労働をさせられ、食事はくさったにおいのするスープ一杯、おがくず入りのパン一つ。シラミだらけの体を蛇口からしたたる水で洗うだけ。おなかと背中がくっつきそうな飢えなんて一度も経験したことはない。何よりもつらいのは孤独だと思う。ぼくは毎日おなかいっぱい食べ、大量のお湯でシャワーを浴び、家族に守られている毎日が当たり前だから、それを幸せと思ったことは一度もない。ぼくにとってそれが基本でそれ以上が幸せで、それ以下が不幸だと思っていた。

今、この本を読み終わって、そんな自分はずかしいと思った。そしてぼくの生きているこの現実の社会全体に対しても「それでいいのか？」と言いたくなる。もっともっとみんなが当たり前の幸せに感謝しなければいけないと思う。平和というものが、どれだけ大切で価値のあるものなのか初めて頭じゃなく心でわかった気がする。この本に出会ってよかった。いつもそばに置いておこうと思う。

小学生の部・最優秀賞(小四)

分かり合う世界

佐久間 春奈

審査員のコメント

本をきちんと読み込んで大切なところを正しくとらえています。親の「面白いの?」の問いかけに「おそろしいから読んでいる」と答えた視点や、頭で分かる理解と心で分かる理解を使い分けて認識している点などたいへん素晴らしいです。

受賞者のコメント

ぼくは、今回の感想文は感想というよりも、読みおえた後の気持ちをありのままに書いた文です。学習で学んだ歴史では、人物名や年号といった表面だけの情報を、教えられます。しかし、この「ヒトラーのはじめたゲーム」は、歴史の裏側の事実をぼくに教えてくれました。どんなにつらい時も、苦しい時も、この時代に生きた彼らにくらべると、それは「つらさ」や「苦しみ」ではないと思えるのです。ぼくは、この本をたくさんの方や大人の人に読んでほしいです。そして、感想文に書いたように、この本をぼくは一生大切にそばにおいておこうと思います。

十五キロメートルしかはなれてない国、イスラエルとパレスチナ。ガリトやメルヴェドの手紙からは、紛争の辛さが伝わってきた。そして、二人の平和と自由というゆめも、いやというほど伝わった。

自由といえば、友だちと遊ぶとき、好きな事ができるとき。でも、両国の人々は自由がうばわれ、外出禁止れいがでたり、学校が閉ざされてしまったりして、私たちのように自由がなかったのだ。

私だったら、自由がなくなると、頭がまっ白になって元気がなくなるだろう。そして、すぐく友だちがこいしくなるだろう。こんなにも辛い事は、両国の人々にしか分からないだろう。

でも、日本にも戦争があったから、両国の人々にしか分からない事を、少しでも分かってあげる事ができたらいいと思う。

まず、パレスチナ人になったつもりで考えてみる。外出禁止れいや、学校閉さ、イスラエル人へのふくしゅうのために石を投げる行い。とてもたえられない。きまりばかりで息がつまるだろう。キャンプでの生活はどんな感じなのか。キャンプといえば楽しいイメージだが、難民キャ

ンプとは、戦争のせいで住んでた土地をうばわれ、仕方なくくらししている場所なのだから楽しいはずがない。それに、テントではなく石づくりの家を建てている家族も多いから、私たちが思いうかべるキャンプとは全くちがう。

次に、イスラエル人になったつもりで考えてみる。イスラム暦の新年八月十四日。イスラム教徒にとって大切な祝日だが、衝突がおこりやすい日でもある。でもパレスチナのような外出禁止れいが、イスラエルではあまりでてないので、辛いけれど、その面ではパレスチナより少しだけ楽かもしれない。

ところで、今の日本は平和と言われているが、両国とのちがいは何だろうか。それは、日本が他国と分かり合える事だ。分かり合って、おたがいを知り平和になっていくのだ。これを両国はできず、平和になれずにいるのではないか、と私は思う。

私にとって「平和な世界」とは、おたがいを分かり合い、笑顔でいっぱいになる世界の事だ。そして、とうぜん戦争と紛争がこの世から消えてなくなり、国どうしが信頼し合える世界。それが私にとっての平和な世界だ。

だからイスラエルもパレスチナも、おたがいを分かり合って、平和にするべきだと思う。

受賞者のひとこと

私がこの本を読もうと思った理由は、実話を読んでみたかったからでした。

作文を書く事は、とてもむずかしかったです。私は、もともと文章を書く事がすごく苦手でした。ですから、最優秀賞を取る事なんて夢にも思っていませんでした。

じゅくからの電話で、受賞の知らせを聞いた時は信じられなくて、まあがってしまいました。お父さんや、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなに知らせました。なんてったって、苦手な作文で、この私が、最優秀賞をとったのですから。

私は「友だちになれたら、きつと。」という本に出会わせてくれた先生や家族に感じやします。

小学生の部 最優秀賞(小五)

大切なお守り

朝日 古都

いろいろな人のとても大切なお守り。この物語は、主人公の潤が、亡くなったお父さんが住んでいた里美村へ山村留学をして、お父さんの足跡をたどるお話です。潤がお父さんの形見に守られて、だんだん自信をつけ、たくましくなっていく姿をとてもうれしい気持ちで読むことができました。

私は毎年、初もうでに神社へ行き、学校や塾用のお守りを買って交通安全や勉強のことなどをお願いします。だからお守りを買っただけでも安心できます。みんなにも心のお守りはあるのでしょうか。

私のお父さんはしゅ味で一年に一、二回フルマラソンに出場します。ある大会の前日の夜、私はお父さんのために布でお守りを作り、『パパガンバレ』と、ししゅうをしました。そのお守りの中にあめとお父さんに完走してほしいという気持ちを入れて渡しました。お父さんはそのマラソンでみごと完走してくれました。」と中、何回もリタイアしそうになっただけ、このお守りのおかげで最後まで走り切ることができたよ。」と言ってくれたのでとてもうれしく思いました。その後の大会もお父さんは

ずっとお守りをポケットに入れて一緒に走っています。

私のお守りは神社で買ってくる以外にもう一つあります。それはチョコレートです。塾のテストの時、その休み時間に「チョコレートを食べたら血糖値がアップして集中できるよ。」と、お父さんとお母さんから言われて少し前からこっそり食べることにしています。(このことはないよにしておいて下さい。)そのせいか少しずつ成績がよくなってきています。チョコレートの力とお父さんやお母さんの気持ちが合体して私に伝わってきて、チョコレートはとても心強い味方になってくれています。

今年の北京オリンピックのソフトボールの日本チームでも一人の出場できなくなった選手が、全員に桜の花の柄をししゅうしたお守りを渡していました。このお話も私の場合と似ています。その選手も自分の分までがんばってと伝えていたのでチームが金メダルを取れたのでしよう。

私だけでなく、いろいろな人達もこのようにお守りを使って願いがかなうと信じているのでしよう。成功するために努力も大切ですが、仲間や家族の支えが必要だということがよくわかりました。

強くなれるお守りをこれからもみんなに作っていききたいです。

受賞者のひとり

「読書作文で最優秀賞をもらって」

私は初め、何を書けばいいのかわからず、ずっとなやんでいました。そして読書作文を出すことをやめようかなとさえ、思っていました。でも、先生やお母さんにはげまされてなんとか書くことができました。そして読書作文を出したことを忘れてしまっていました。そして先日、塾長先生によばれました。何と最優秀賞をもらったとのことでした。家族のみんなに知らせたらびっくりしながらも、おめでとうといってくれました。うれしかったです。

小学生の部・最優秀賞(小六)

がまんも得か

赤堀 萌香

心の時計は、おく深くにかくしてしまいもう時が過ぎているのか分かっていないじゅん。父さんが死んでしまっただけから、じゅんの心はカーテンをしめてしまった。どん底からはい上がろうともしない。でも、あのポスターだけは、じゅんの心のカーテンをあけようとした。じゅんの初めての勇気が…。

「父さんの田舎の里美村ってこと。」

興味があるものを見てしまった子どもは、そこからはなれることさえできなくなる。まさにくぎづけだ。

私は四年生の頃、友達と二人で和田島キャンプ体験教室に参加しました。友達の他は知らない子ばかりでした。このキャンプは班活動なので、五年生とグループになりました。人見知りをしてしまう私は、五年生とも自分から話せません。けれど、私のペアがとても明るくおしゃべりな子だったので、五年生とも仲良くなれました。私一人じゃ何もできないんだ、と少しくやしくなりました。私に比べて一年生は何でも素直で正直でまねできない純粹さをもっています。でも弟は私のあこがれている

純粹さとはちがいます。弟はある日、野球がやりたいと言い出しました。姉としてやりたいなら、やりなよ。と思っていました。弟の野球が始まると母は、弟の心配、父は仕事に、私はその度に祖父の家に行かなければなりません。でもがまんは姉につきものなのです。ここはぐっとふんばって、母を待つのでした。

私が一年生の頃、運動会前日にこんなことを言ったそうです。

「何回練習しても、いつもビリなんだよ。」と泣きました。父はいっしょに走ってくれるし、母は足のあげ方を教えてくれたそうです。

あれから五年がたちました。今年はなぜか速いグループに入っていました。なかでも私は遅い方だったのでビリになってもおかしくなかったです。すごくプレッシャーを感じ、毎朝のトレーニングに力を入れました。

いよいよ本番。

深呼吸。ドキドキしないと決めてスタートラインにつきました。まさに勇気です。

「バンッ」

走り出すと、いつもより足がずんずん前に進みます。

結果は四位。

二人もぬかせたなんてびっくりして、いまにもおどり出しそうでした。

私はもう五年間も姉をやっています。昔とはちがい、少しらん暴になった弟の世話は簡単ではありません。けれども、姉だったから学べたことだっただけたくさんあります。がまんする強さも、勇気を出す強さも全て

姉であったから得られた強さです。

これまでたくさんのがまんをしてきました。いつも「がまんは損だ」と思っていたけれど、本当は得をしているんですね。

対象図書名 龍神様の銀のしずく

受賞者のひとこと

作文を書いていて、一番心に残ったことは『勇気』です。

大きな勇気は人を感動させます。人の心にひびくのです。けれども小さな勇気は人に気づいてもらえないときが多いです。例えば、『がまん』です。自分がほしい物、さげびたいこともぐっと心にしまい、がまんする。がま何を何回もくり返して、やっと自分の希望どおりになるのです。

「ちりも積もれば山となる」の例えのとおり、小さな勇気がたくさん重なって自分を大きく成長させ、りっぱな大人になるのではないでしょうか。

派手でなく地味な勇気。がまんの一つ一つが百も千も積み重なった時、それは大きな喜びになります。一日一日をプラス思考で大たんに進んでいくことが大切だと、そんなことを思いながら作文にしました。

中学生の部 大賞

命をつなぐ希望と勇気

松木 俊樹

年間三万人——そう言われても、この数字はピンと来ない。なぜこんなに自殺者がいるのだろうか。サブタイトルに「その一言を語れる今」とある。その声に、ぜひ耳を傾けたいと思った。

僕は今まで、自殺は身勝手で、弱い人間のすることだと思い込んでいた。死ぬつもりなら、逆に何だかって出来るはずだ、という考えをもって来た。でも、それは少し違っていた。

単にその人の気持ちだけの問題だけではない。今の世の中の構造にも大きな問題がある。弱者を自殺にまで追い込んでいく経済社会だ。まさに「格差社会」という深刻な現象だ。和浩の父もその渦にのみこまれたと言ってもいい。

実は僕にも血の気が引くようなとてもショックな出来事があった。去年、父の経営する会社が倒産したのだ。地元でも老舗として根づき、ずっと優良企業として評価されてきた会社だ。父はいろいろなアイデアを出し、他にはない画期的な商品開発もやってきた。ぼくは小さい頃から、頑張っている父を見てきた。だから、将来は自分も父の会社で働き、

その仕事を継いでいこうと、当然のように考えていた。

それが、突然、「倒産」という予想もしないことが起きたのだ。商品の時期的なタイミングが悪く、資金繰りが上手くいかなかったのだ。父は、その時、これ以上被害を大きくしないために、そして関連の人たちに迷惑をかけないために決断したのだった。その時小学生だった僕にも、父の会社が何かとんでもないことになっていることはわかった。父は記者会見をしたのでテレビや新聞でもあったという間にニュースになった。学校に行くと、僕は校長室に呼ばれ、事情を尋ねられたりした。あまりの出来事に僕は卒倒しそうになった。悔しいやら、悲しいやら、不安やら、自分でも何が何だか分からなかった。

そんな中でまっ先に考えたのは父のことだった。これから、一体どうなるんだろう。父は大丈夫なのだろうか。何をしている時も、そのことばかり考えていた。心配で心配で、父のことが頭からはなれることはなかった。僕は何となくオドオドしながら、父の様子を観察してた様な気がする。自分がまだ子供なので、何の力にもなれないことが、とても情けなかった。

もし、あの時、和浩の父のようにぼくの父も悲しい選択をしていたら、僕は今頃、どうなっていたか分からない。和浩のように、父親の死を受け止め、強い信念をもって、あの様な立派な活動は出来ないと思う。和浩はとても勇気がある。実名で、しかも堂々と顔を出してテレビ、講演に出たりしたのだから。彼をそこまで突き動かしていたものは何だった

のだろう。自殺者への偏見をなくし、遺児たちの心の痛みを軽くしなければ、という強い信念が伝わってくる。

和浩の父にとっては、あの時、ああするしかなかったのかもしれない。遺書の「ごめんね。」の一言がとても痛々しい。「自殺は語れない死」という表現が胸に突き刺さってくる。

僕の学校に「自殺は救うことのできる死」というポスターが貼ってある。今まで僕はその前を素通りしていた。この本を読んでから、その意味を考えてみた。子どもたちの場合、大抵は、気付いてあげれば救えるということだと思う。

自分出来ることは何だろう。僕の母は、「仲間はずれにされている子がいたら、毎日あいさつの言葉を交わすだけでもいいんだよ。その子の気持ちは救われるんだよ。」といつも言っている。「一人ぼっちじゃない!」と思うことが「希望」につながるということだ。それなら僕にもできる!

和浩の父のように倒産に追い込まれ、自殺する人が多い世の中。ただ「自己責任」という一言で片付けてしまっているのだろうか。年間三万人、毎日八十人以上の人が自らの命を絶っていることになる。こんな世の中で絶対いはずがない。和浩たちの活動だけでは追いつかない。国の支援が形にならないといけないと思う。

僕の父は、あんな大変な事件があってもめげなかった。むしろ新たな事をやろうと意気こんでいる。挫折しても、そこからはい上がる強さを

持っている。父を支える母も、「人生にはいろいろな事がある。家族みんなが元気であることが何よりだ。そして子供という宝があるから、幸せだ。」と、明るく話してくれたので、僕も心から幸せなんだと思っている。そして、そんな両親の子供で、心から良かったと思っている。

対象図書名 ぼくの父さんは、自殺した。

審査員のひとこと

自分の父親の経験を正しく理解しようとしているところがすばらしいです。そして、感情的にならず距離をおいてよく書き上げたと思います。お母さんの助言もすばらしくご本人もそれを受け入れている。だからこそこの作文が書けたのだと思います。

受賞者のひとこと

その日は、ちょうど塾のある日だった。授業が終わる頃に、母も来ていた。「大事な話があります。」という先生の電話で、母は「息子が何かやらかしたのだ」と思い込み、父も同席していた。先生は神妙な面持ちで話を切り出した。「お父さん、お母さん、大変です!」僕の両親はその言葉で身構えた。「大賞です! 俊樹君が大賞に選ばれましたよ!」

両親はボカンとしていた。僕も一瞬自分の耳を疑った。「おめでとう!」握手を求める先生の手が力がかもった。僕は夢心地のまま、握手されて

いた。母は、この日の昼、何年ぶりかで美しい虹を見たと言う。「今日は何かいいことがあるかも」と思ったそうだ。九月二十七日土曜日のことだった。

僕は今回の作文で、父の事件を書くことに正直、ためらいがあった。

でも、書くことで自分の気持ちも整理でき、改めて父を誇りに思う気持ちが強くなった。考えてもいなかった名誉な賞を頂き、指導して下さいました先生に、今、感謝の気持ちでいっばいです。

中学生の部・最優秀賞(中一)

「犬たちがくれた音」を読んで

菅野 大

「聴導犬。」それは、耳の不自由なユーザー（飼い主）を介助する為に特別な訓練を受けた犬。ぼくは動物が好きなのでテレビで見て、聴導犬のことを少しは知っていました。犬はとても知性の高い動物だからこの仕事には適任だと考えていました。そして、「聴導犬」と耳にすると頭に浮かんでくる言葉があります。それが「虐待」。それは、ペットを飼育しているときに気に入らなかったり、自分の思い通りにならなかったときなどの様々な理由でペットに暴力をふるうことだ考えていました。そんな事をしている人は自分勝手に、生命の大切さをわかってないと感じていました。

そして、この本に出会い、いろいろなことを知りました。聴導犬の卵が月一回パピークラスという所に行ったり、怪我や性格で聴導犬になれずにデモンストレーション犬やピアー犬、補助犬になったり、才能が認められて多目的犬になったりなどと新しい知識を得ました。このことから、僕は「聴導犬」とは一言では言い表せないものすごく深い意味をもった言葉だと感じました。

さらにもう一つ、ある疑問が頭に浮かびました。それは、

「聴導犬の訓練って犬達からしたら辛くないのかなあ。」

というものでした。そしてその考えが、

「聴導犬の訓練って虐待なんじゃないのかなあ。」

という発想を生み出したのです。僕は最初に述べたように、聴導犬はともよいものだと考えていました。でも今まで考えていたことと全く違うことを考えてしまいました。

普通の犬なら、ただ平凡な毎日を過ごしているのに何故、聴導犬達は苦しい労働生活を過ごさなければならぬのでしょうか。たしかに深く考えれば犬にとっては聴導犬が楽しいと感じている犬もいるかもしれませんが。でもそれは犬に聞いてみないとわかりません。それでも、先程からの話で、僕は聴導犬を批判してしまいました。

さらに僕は聴導犬の事を考えている時に、「一般に飼育されている犬は普通なのか。」とまた考えてしまいました。聴導犬の次は一般に飼育されている犬まで虐待されているのではないかと考えてしまいました。

動物を飼うとはエサを与え、世話をすることですが、人は自らの意志で自由に行動できるのに、犬は何故自分の意志で動けないのでしょうか。

動物は人の欲を満たす道具でも忠実な召使いでもありません。人と同じ心を持つ生物です。その自由を奪うのはいけない事だと感じます。

確かに人間に飼われていれば餓死することも、危険な目に遭遇することも滅多にありません。でも、それは人間で例えば監獄で暮らすよう

なものだと感じます。たまには餓えて苦しみどこかをさまよってもいいじゃないですか。たまには危険な目に遭遇してもいいじゃないですか。それら乗り越えるから人生ってスリルがあって楽しいじゃないですか。縛られて生きる人生なんてつまらないに決まっています。

ここまで僕はペットの飼育を否定しました。でも、動物は好きだから将来ペットを飼いたいです。その時、自分が自分を否定している事に気が付きました。自分の中にもう一人の自分がいるように、心の中に二つの考えがあるのです。「動物を飼いたい」と考える心と、「動物の飼育は虐待だ」と考える心。二つを考えると頭が混乱します。それでもペットを飼ってみたいです。

僕は将来二つの考えをまとめたいと考えています。そして、動物と平等に暮らしていきたいです。牧場は動物がのびのびと暮らせていい場所だと感じています。

でも僕は動物と平等に、対等な立場で暮らしていく方法がわかりません。だから、将来動物と「共存」できる方法を探していきます。

いつか、その日を目指して。

最優秀賞をいただいて

その知らせは僕の授業中にかかってきました。電話がかかってくるのはいつものことなので、気にしなかったのですが、コール音が長かったので変に感じました。そうしたら、受賞の知らせでした。僕は、嬉しいというよりも耳を疑ってしまいました。理由は、正直、今回の作文の出来は悪いと考えていたからです。塾の先生も疑っていたようです。再度確認の電話を入れていたぐらいですから。でも、その電話で改めて事実を知り、とても最高の気分になりました。今は、事故に遭うのではないかと不安です。

中学生の部・最優秀賞(中二)

「ぼくの父さんは、自殺した。」を読んで

三宅 理加

今、私は一生懸命になれることもある。何でも相談できる友達もいる。毎日笑っている私にとって私の毎日はとても生活しやすいものだ。が、しかし生き残り戦争とも言われ、大人達は疲れた顔で毎日を過ごし、自殺者年間三万人を越す社会とはどんなものなのだろう。私達も将来「生きたい」ではなく「生きなければいけない」社会で暮らすのだろうか。私のクラスには、クラスになかなかなじめず学校に来なくなった子がいた。その子はいつも一人で私達と仲良くなるうとしても私達は受け入れなかった。その子が学校に来なくなって、なんでそれくらいで…と私達は思っていた。

それから少しして、私は部活で居場所がないと感じた時があり、色々なことが絡まって全部面倒臭くなってしまったことがあった。その時、あの子はこれよりもっと辛かったのだらうとあの子の痛みを少しだけ分かった気がした。あの子の痛みに気付いて初めてあの子を受け入れなかったことを後悔した。

この本にあつたように心のコンディション障害の壁は高くも低くもな

と思う。私は友達や勉強、部活がうまくいっている時は少しぐらい何があっても気にしないだろう。しかし、親に怒られたり、友達とうまくいかない時はささいなことでパニックになってしまっただろう。

私はあの時、色々なことが絡まって心のコンディションが悪くなっていったのだ。だから普段なら何でもないことが大きな壁になり、居場所がないと感じていたのだ。私の壁を低くしてくれていたのは、一人の友達だった。

「大丈夫じゃって。」
と一言言ってくれた。ひとりじゃないんだと思えてとても支えになった。

あの子の壁を学校に来れない程高くしたのは何なのだろう。それは私達なのではないかと思う。私達はあの子を受け入れようとせず、あの子はいつも一人だったからだ。あの子は誰にも言えず、ため込み絡まり抜け出せなくなった。孤独は壁をとて高くする。太陽の光さえ届かないほど、青い空が見えないほどに。私達は学校という小さな社会からあの子を追い出したのだ。追い込まれ壁が高くなると人はこの社会で生きていけなくなってしまうのだ。誰もが躓くことがあるが、その時一人じゃないと思えて、弱音を吐ける場所があれば誰だって青い空を見ることが出来ると思う。

社会から追い出され自殺する人を減らすためには、誰もが人とつながり合い、信じ合い「孤独の壁」をなくすことが大切だと思う。私達のように人と関わらない、関わろうとしない人が大人になれば、社会はもっ

と居心地が悪くなるだろう。人と関わらないのは傷付きたくないからかもしれない。でも、人は傷付けられながらも、「人」という漢字のように支え合いながら生きている。だから人は強いのだと思う。「孤独の壁」をなくせば、手を差しのべれば誰だって壁を乗り越えられると思う。

でも、そんなのは夢物語で誰もが信じ合い、自殺者三万人をなくすことはできないと言う人がいるかもしれない。でも、社会とは私達一人一人が作り上げていくものだ。今、年間自殺者は三万人以上だが、確かに和浩さん達は動き出した。最初は少しの人たちが始めた活動が、つどいから和浩さん達のような遺児の心を救った。またその人達が辛い思いをする人を少しでも減らそうと新しい活動を始め、たくさんの方の心を救っていく。そうして一人では出来ないことが「人のつながり」によって人や、社会を少しずつ変えていく。一人一人が少しずつ変わること社会は変えることが出来るのだ。

私はこの本を読むまで自殺に偏見を持っていた。弱い人が自分の意志で死を選ぶと。だが、自殺は社会の壁に躓いた人が追い込まれて生きたいのに家族を残して死んで行くことだと分かった。きっとそのことを私達が分かるだけでも少しずつ社会は変わっていていると思う。

私はこれまで、嬉しいことがあった時は、みんな喜んで、辛いことがあった時は誰かと一緒に悩んで来た。これからももちろん私達は辛いことや悲しいことを経験していくと思う。その時、私は周りにいる大切な人の支えになりたい。でも私は誰かが辛くてもその気持ちを全部は分

何かにつながるようにがんばりたいです。

かつてあげられない。でもその中で大切なのは少しでも分かりたい、支えになりたいと一緒に悩むことだと思ふ。そうしてみんなが繋がり、大切な人が一人じゃないと思えるように少しずつ私の周りから社会を変えていきたい。

私は、少しでも多くの人とつながって、明日も生きたいと思えるみんなが青い空を仰げる社会に参加したい。

対象図書名 ぼくの父さんは、自殺した。

受賞者のつとむ

私は昨年もこの賞をいただき、今年もと聞いてとてもおどろきました。が嬉しかったです。

この感想文を書く時、自分は将来どんな風に生きているのだろうと思いました。私は壁にぶつかつたときと一人ではないと思えます。周りの誰かが必ず一緒に悩んで、立ち向かつてくれると思うのでそんな誰かとのつながりを大切にしていきたいです。そして、将来自分は、時代のせいにして背を丸めて歩くのではなく、堂々と一生懸命生きる大人になりたいです。この本には、きっと皆が共感する事があつて皆が生きるヒントを与えてくれると思います。私は読書感想文を書いて、この本についてよく考えて、本当に良かったと思います。そしてこの事が明日から

中学生の部 最優秀賞(中三)

ゲーム

村上 法子

「ここで起こることは、すべてゲームだと思え」と、アロンはジャックに言ったけれど、私達の今の生活も、「ゲーム」なのではないだろうか。

私達は今、憲法や法律などに従って生きている。それらは「ゲーム」のルールだ。そしてそのルールに違反すれば、ゲームオーバー。犯罪者だ。死刑かもしれない。ジャックたちの生活に比べれば、自由ではあるが、ルールが少し変わったただけであって、それほど違ってはいない。

そもそも、「生きる」ということはどういうことなのだろうか。これは、誰も考えることではないだろうか。私達は、何のために生きて、何のために死んで行くのだろうか。ある人は、「幸せを見つけるために生きている」と言う。確かに、そうかもしれない。自分にとっての幸せ、あるいは幸せでなくても、それに匹敵するような心に残るものを探して、それを感じ、死ぬ時に「生きていて幸せだった」という人生を送るために、私達は生きているのかもしれない。

しかし、もし本当にそうなのであれば、死ぬ時にそう思えなかった人

は、生きていた意味がなかったのかということになりはしないか。

ジャックが、死んで行った人達を見て、「彼らは幸運だ」と言った。「死」を望んでいなかった人達の「死」であっても、その「死」を「幸せ」だったとすることなどできるのだろうか。それはできない。でも、死ぬ瞬間に「幸せ」を感じたなら、例えその「幸せ」が「死」というものといコールであっても、その人は「幸せに死んだ」ということになるだろうか。私は、そうとも考えない。きっと、ジャック達の周りの人達も、今の時代の自殺して行く人達も、みんな生きていたかったということには間違いない。苦しみから逃れる方法が、「死」しか見つからなかっただけなのだ。私だって、「死にたい」と思ったことが、何度かある。けれども、死ぬ勇気などはない。苦しみながら生きていると、いつしかその苦しみは消えて行き、今では「生きていて良かった」と思っている。

私は、「生きる」ということは、「幸せ」を探すことではなく、「生きていく意味」を探すことだと思う。だから、自ら命を断った人、または「生きていて幸せだった」と思えないまま死んで行った人は、決して生きていた意味がなかったのではない。ただ、「生きている意味」を見つけることができなかつただけではないだろうか。そう思うと、「生きている意味」を見つければ、ゲームはクリアだ。私達は、本当に「ゲーム」をしているようだ。

では、私達は、どうして死んで行くのだろうか。生き続けてはいけないのだろうか。ある人は、「死によって、私達は命の大切さを知る」と言

う。これも共感できる。確かに、「死」がなければ、人は、「生きている」ということが、どれほど特別なことか、気付けないだろう。「ありがたさ」や「大切さ」は、その物事の反対があるから分かるものだ。例えば、健康であることがありがたいと感じられる人は、健康でない時があったからだ。友達の存在が大切だと分かる人は、別離を経験したことがあるからだ。だから、生きていることが「ありがたい」と思えるのは、「死」があるからこそなのではないだろうか。ずっと生き続けているだけだったら、気付けないことだろう。私は、「死」とは、私達に、生きているということが、ありがたくて特別なことなのだとこのことを気付かせてくれるためにあるものだと思う。

しかしながら、たいていの人は、「死」に対して恐怖心を抱いているのではないだろうか。もちろん、私も、そのうちの一人だ。例え「死にたい」と思っている人であっても、実際に「死」が間近に迫ると、やはり恐怖心がわくであろう。「一体、死んでしまおうとどうなってしまおうのだろう」「この質問には、誰も答えを出すことができない。だからこそ、恐怖心がわくのであろう。

「死後」は分からないが、私達の「生」と「死」には意味がある。だから、この世に存在しているもの一つ一つが、意味を持っているのだ。例えば、私にとっては嫌な存在の昆虫も、ヤモリにとっては大切な食料である。そして、私にとってそのヤモリは、虫を食べてくれるありがたい存在である。このように、この世に存在するもので、その存在に意味

のない、無駄なものは、ないのではないだろうか。私達の「生」と「死」も、きつともっとたくさんの意味を持っているはずだ。そして、もっと深い存在意義というものがあるはずだ。私達は今、それを探す「ゲーム」をしているのだ。

受賞者のひとこと

まさか、私の作文が最優秀賞に選ばれるとは、思いもありませんでした。今でもあまり受賞の実感がありません。本当に私の作文が選ばれても良かったのでしょうか。でも、今回の作文には、私の思いを正直に込めて書きましたので、とても嬉しく思っています。

「ヒトラーのはじめたゲーム」は、とても残酷で、現実にあったことなどは、とても思いたくない内容の本でした。けれども、その奥底から、私は、「生きる」ということ、「死ぬ」ということ、そして「人生」ということについて、いろいろと考えさせられました。

今回の受賞で、わたしの作文が、たくさんの中学生の人達にも読んでもらえるそうなので、「生」と「死」、そして「人生」について、深く考えてみるきっかけにしてもらえたらいいと思います。

対象図書名 ヒトラーのはじめたゲーム